論文

コンタクト・ゾーンとしての文化人類学的フィールド
——占領下の日本で実施された米国人文化人類学者の研究を中心に

谷口陽子

1　本論の主題

本論では，文化人類学者による異文化接触の場としてのフィールドを「コンタクト・ゾーン」（contact zone）の観点から検討することを目的とする。そのための具体的な分析対象は，1950年代初頭の日本で実施された米国人文化人類学者のフィールドワークおよび民族誌である。

コンタクト・ゾーンとは，ラテンアメリカを専門とする言語学者かつ文学者のメアリー・L・プラット（Mary L. Pratt）が著書 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*［1992］において提起した概念ないし視点である。本著において彼女は，18世紀半ばから始まるヨーロッパの経済的・政治的拡張期を背景に，ヨーロッパ人が非ヨーロッパについて書いた旅行記および探検記を分析対象とし，それらが「本国」のヨーロッパ人の意識における帝国的秩序をいかにして作り出していったのか，またそれらがいかにヨーロッパ市民に対する帝国的拡張主義を正当化する言説を生み出していったのかについて論じている［Pratt 1992 : 3］。

当時ヨーロッパでは，非ヨーロッパ地域に関する旅行記が多大なる人気を博していた。このような旅行記は，ヨーロッパの人々に拡張主義への好奇心，興奮，冒険心，情熱を喚起しただけでなく，遠く離れた地に対する所有や権利の意識，あるいは近接性をもたらすものであった［Pratt 1992 : 3-4］。こうした旅行記および探検記に描かれていたのは，ヨーロッパ人がフロンティアではじめて出会った人々や習慣，はじめて目にしたり触れたりした物や動植物についての単なる紹介にとどまらなかった。それには，ヨーロッパ人がはじめて出会った人，習慣，物との接触において生じた驚きやとまどい，葛藤などの異文化接触における個人的体験が織り込まれていた。

ヨーロッパの拡張期における旅行記や探検記は，その背景に，植民地における「支配する側」と「支配される側」との間の非対称的な関係を有する，テキストであった。しかし，プラットはその内容を詳細に検討していくなかで，両者が接触する場は，権力が一方向的に発動されるライン状の空間ではなく，むしろ双方向的な作用が働くゾーン（領域）であることを見出し，そこで生じる作用をコンタクト，その空間をコンタクト・ゾーンと呼んだのである。プラットは両者を次のように定義している。

TANIGUCHI Yoko　専修大学経済学部非常勤講師

「コンタクト」という視点は，いかにして主体が相互の関係において，かつ相互の関係によって構築されるのかということを強調する。それは，植民地支配者と被支配者，旅行者（トラヴェラー）とをれを受け入れる人びと（トラヴェリー）との関係を，分離やアパルトヘイトによってではなく，しばしば権力の根本的な非対称的関係が存在するなかでの共在，相互作用，絡みあう理解や実践によって取り扱うつもりである［Pratt 1992：7］。

コンタクト・ゾーンとは，植民地における邂逅の空間である。それは地理的にも歴史的にも分離していた人びとが接触し，継続的な関係を確立する空間である。それは通常，強要，根本的な不平等，そして手に負えない葛藤を巻き込んでいる［Pratt 1992：4］。

以上のプラットの定義にしたがい，本論では第一に，文化人類学的フィールドで行われる文化人類学者と調査地の人々との間にもまた，コンタクト・ゾーンが作り出されていたと考える[1)]。その根拠については後述する。そして，両者の間には，どのようなコンタクトがなされ，そこにどのようなコンタクト・ゾーンが成立したのかについて検討する。その際の具体的な検討材料は，1950年代初頭の日本で実施された米国人文化人類学者ジョン・B・コーネル（John B. Cornell）のフィールドワーク（1950年から1951年）と，そこでの調査データを基に彼が著した民族誌である。本論では第二に，フィールドにおけるコンタクト・ゾーンが描かれた民族誌と描かれない民族誌の比較検討を行い，民族誌が各時代の主流理論と社会・政治的状況の制約を受けながら成立していることの具体的様相について論じる。そのことの背景にある問題意識は次のとおりである。

コーネルは，1950年代から1980年代まで米国の日本研究の専門家として活躍した文化人類学者である。日本でフィールドワークを行った当時，彼はミシガン大学の大学院博士課程で文化人類学を専攻する Ph. D. candidate であった。ミシガン大学は，米国における日本研究の一大拠点とするべく1947年に日本研究所（The Center for Japanese Studies――以下 CJS）を創設し，1950年から1955年までは岡山県岡山市に現地研究所を設置して大規模な実地調査を実施した。そのメンバーのなかの一人がコーネルである。コーネルを含めた 3 人の人類学の Ph. D. candidate たちは，それぞれの問題関心に基づいて調査地を選定し，1 年間のフィールドワークを行った。それは，米国の大学が博士論文を作成する人類学の Ph. D. candidate に必ず課する訓練の一つであった。

ところで，彼らが滞在した1950年代初頭の日本は，連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers――以下 GHQ）の統治下にあった[2)]。そのなかで米国は一国で実質的な権力を独占し，日本の「民主化[3)]」を占領政策に据えて法律や制度の改革を実施していた［ダワー 2001：78-79］。つまり，当時の日本は，プラットが *Imperial Eyes* のなかで対象としたのとは異なるが，また別様の植民地的状況にあったのである。

筆者は，GHQ 占領下の日本という，ある種の植民地的状況のなかで実施された米国人文化人類学者によるフィールドワークに関心を持ち，彼と調査地の住民との間にどのよう

にコンタクト・ゾーンが成立したのか，あるいはしなかったのかを調べるべく，コーネルのかつての調査地である岡山県阿哲郡草間村馬繋（まつなぎ）（現新見市草間馬繋）を2003年から2005年にかけて断続的に訪れ，当時彼と交流のあった住民への聞き取りを行った。そのなかで知ることができたのは，コーネルと彼を受け入れた馬繋の人々とは，米国と日本との間に存在する統治する側・される側，戦勝国・敗戦国などの非対称的関係を背景としつつも，１年もの間にともに「同一の現在」［プラス 1986：61；ロサルド 1998：82］を共有するなかで，様々な葛藤をも巻き込みながら友情を育み，継続的な関係を作り上げていったことであった。しかし，彼の博士論文 *Matsunagi : The Life and Social Organization of a Japanese Mountain Community*［1953］およびその縮小版である同タイトルの民族誌［1956］を参照しても，フィールドで成立したであろうコンタクト・ゾーンについてはどこにも描かれてはいない。

フィールドでの人類学者は，調査地の人々と長期にわたって接触するなかで，「手に負えない葛藤」を抱え込みながら，決して一様ではない相互関係を築き上げていく。しかし，コンタクト・ゾーンが成立する様相を民族誌の記述に織り込むか否かは，個々の人類学者の恣意的判断であるというよりは，人類学における主流理論やアプローチ，人類学者が所属する国や地域，および調査地の社会・政治的関係によって，より大きく左右されるといえる。

以下，本論の構成は次のとおりである。第２節では，文化人類学的フィールドにおけるコンタクト・ゾーンについて，第３節では，コンタクト・ゾーンが描かれなかった民族誌と描かれた民族誌について，第４節では，文化人類学的理論と手法の変化の影響と民族誌について論じる。

2　文化人類学的フィールドにおけるコンタクト・ゾーン

2－1　文化人類学者ジョン・B・コーネルと馬繋の人々のコンタクト・ゾーン

本項では，文化人類学者コーネルが1950年から1951年に岡山で実施したフィールドワークで，馬繋の人々との間にどのようなコンタクト・ゾーンを成立させていったのかを論じる。

筆者は，コーネルのフィールドワーク地である馬繋を訪れる前に，彼の民族誌 *Matsunagi : The Life and Social Organizations of a Japanese Mountain Community*［1956＝1977］を紐解いた。そこには，1950年当時の山村馬繋での人々の家族・親族関係，生業，多様な相互扶助組織などについての詳細な記述がなされていた。それには写真が含まれ，1977年に日本語訳された「馬繋――山村の生活と社会」［1977］にも写真が十数枚示されていた。それらの写真は，茅葺屋根に囲炉裏のある伝統的な住まいで生活する人々，農作業や屋根の葺き替えにおいて協業する人々，祭りで神輿を担ぐ人々，囲炉裏の前で客人に茶を振る舞ってもてなす女性，牛を牽いて歩く少年たちの姿を写したものであった。これらの写真は，たしかに当時の日本の山村における人々の生活を雄弁に物語るものではあった。しかしその一方で，人々の生活を客観的な視点から観察し，描写しようとする調査者

の意図は汲み取れても，彼が住民との間で具体的にどのような交流を行ったのかは民族誌の記述からも写真からも読み取ることはできない。こうしたことを背景に，筆者はコーネルと住民との交流がどのようになされていたのかを調べるため，当時彼と親しく接触した馬繋の人々にインタビューを行った。当時のことをよく知る住民たちは，1950年当時29歳の青年であった米国人コーネルのことを次のように記憶していた。

コーネルは，住民たちにとっては生まれてはじめて間近で接した異郷の人であった。彼は米国人にしてはあまり大柄ではなく，ゆっくりだが流暢な日本語を話し，常に小さなメモパッドとペン，そしてカメラを携帯していた。彼は当集落から1.5キロメートルほど離れた東村（ひがしむら）の民家を宿とし，毎日そこから徒歩で馬繋へと通っていた。集落内で顔見知りに出会うと深々と頭を下げて挨拶し，誰にでも気さくに話しかけたが，彼が調査をはじめて間もない頃には，道端で話しかけられた女性が驚いて逃げだしたり，カメラを向けられた少年が彼に殴りかかろうとしたりしたこともあったという。住民たちのなかには，当初警戒心を抱いていた人もいたが，彼の率直で根気強い態度に触れることで徐々に打ち解けていき，同年代の青年たちを中心に親密な人間関係が築かれていったのだという。またコーネルは，当時としては珍しかった米葉タバコ，キャンディー，チューインガムなどを携えて調査に赴いていたことにより，住民たちは，彼が持参する物品に羨望の眼差しを向け，それらの物品の授受行為を通じて自ら積極的にコーネルと関わろうともしたと述懐した。

住民の側からすると，コーネルが関心を持って住民たちに質問することの多くは，決して目新しくない日常的な事象や行為であった。自分たちが発する言葉を一字一句聞き逃さないよう記録するコーネルの姿は印象的であったという。たとえば彼は，常時携帯しているメモパッドを左手に摑み，腕で固定して右手に握ったペンで斜めに走り書きしていたとか[4]，何にでも興味を持ち，自らが納得する答えが得られるまで「これは何ですか？」「どうやってやったのですか？」などと尋ねたとか，さらには結婚式や葬式など人が集まる場には決まって「ついていっていいですか？」と尋ね，カメラを持参し写真撮影をしていたという彼の行動はよく記憶されていた。

コーネルと馬繋の人々とは日々顔を会わせ，接触するうちに相互理解を深めていったが，日米間に横たわる生活習慣や考え方の違いに直面し，戸惑うコーネルの姿も記憶されている。それは，コーネルが手作りのぼた餅やおにぎりだけは決して口にしなかったことや，方位を十二支で表す方法について繰り返し説明しても理解できなかったことである。他方で，馬繋の人々もまた，コーネルから投げかけられる質問によって，自らの当たり前の日常を改めて見つめなおすこともあったという。そのようなやりとりがなされる光景は，彼が作成したフィールドノートに記されている。筆者は，彼と長年の友人であり，1980年代にコーネルが馬繋で追跡調査を行った際に調査助手を務めた人物から，彼のフィールドノートのコピーを見せてもらったことがある。なお，コーネルはこの人物に対してフィールドノートのコピーを託すとともに，それを自由に使用する許可も与えたという。そのコピーを見る限り，そこからは，住民たちが日米間の文化の違いに対して関心を抱き，米国の若者の生活について，あるいは恋愛観や結婚観について逆に質問したり，自らの生活や恋愛観，結婚観を相対化するような語りを行う人がいたことが読み取れた[5]。調査地の人々は

コーネルが投げかける質問にただ反応する受動的存在ではなく，彼に積極的に語りかけたり観察したり，時には駆け引きを仕掛ける能動的主体でもあったことがわかる。

実際のところ，コーネルのフィールドワークが実施された状況を考えると，調査者／被調査者という関係だけでなく，GHQ による統治を背景に戦勝者／敗戦者や統治者／被統治者という非対称的関係が存在した。また，コーネルの戦時中における経歴を考えると，なおのこと馬繋の人々との間にある非対称性が際立って見える。

彼は，1921年にインディアナ州の東シカゴで生まれ，地元東シカゴの小中高等学校を卒業後，ミシガン州アナーバーにあるミシガン大学へ進学した。太平洋戦争が勃発したのは彼がミシガン大学に在学中であった。1941年12月 7 日（ハワイ時間）にハワイ州の真珠湾が攻撃されて太平洋戦争が勃発すると，翌年の1942年には，軍の指令によってミシガン大学に日本語学校が開設された［University of Michigan Regents 2006］。彼は，開校した同校にて日本語の習得を始めた。そのさなか，彼はさらなる言語訓練を積むためにミネソタ州のキャンプ・サヴェッジ（Camp Savage）の軍事諜報部日本語学校に入学した。その後，彼は習得した日本語を生かして軍事諜報部に勤務し，日本軍の暗号解読にも携わった。戦争が終結した翌年の1946年に，彼は軍を離れてミシガン大学に復学し，同大学および大学院修士課程で極東の言語と文学（Far Eastern Language and Literature）を専攻して B.A. および M.A. を取得した。博士課程に進学すると，彼は専攻を文化人類学に移し，1950年から開始される CJS の岡山での現地調査に参加することになったのである。馬繋調査を終えた後，彼はそこで蒐集した調査データを基に博士論文を作成し，1953年にミシガン大学で Ph. D. を取得した。その後，1955年から1987年までテキサス大学オースティン校で教鞭を取る傍ら，米国における日本研究の専門家として多方面での業績を残した。そして，1994年に73歳の生涯を閉じた。以上は，彼が文化人類学者として33年間勤めたテキサス大学オースティン校のウェブサイトに掲載された，彼を追悼する文章からの引用である［Brow & Moore 2001］。

こうした彼の経歴を念頭に置き，筆者はコーネルと親しかった80代の男性に対して次のような質問を試みた。「コーネルさんがはじめて馬繋へきた1950年は戦争が終わって間もない時期でしたが，はじめて米国人であるコーネルさんと接した時に抵抗感はありませんでしたか」。それに対する彼の答えは次のようなものであった。

> コーネルさんは戦時中に米軍の任務で九州へきていたことがあると話してくれたことがある。たしかに米国は日本の対戦国であったが，はじめに真珠湾攻撃を仕掛けたのは日本である。それに戦争中の日本は米国が日本にしたことよりもっと酷いことを他の国にしてきた。日本が戦争を仕掛けたのはアメリカの強さを知らなかったからである。その当時，戦争の情報源となったのは，ラジオと学校教育だけであったので，我々はそれを信じるしかなかったのだ。

このように語った男性は，戦争を知らない世代である筆者に対して，過去の日米間の戦争について総括しながら，それにもかかわらずコーネルとの間に強い信頼関係が築かれて

いたことを示したのである。この語りは，占領下の日本において二重三重の非対称的関係を背景に持つコーネルと住民との間で，相互作用，相互理解が生じ，まさにコンタクト・ゾーンが成立していたことをよく表す事例である。

2－2　コーネルの民族誌「馬繋」とコンタクト・ゾーン

コーネルのフィールド馬繋では，たしかにコンタクト・ゾーンが成立していたことが筆者の調査から明らかになった。しかし，それはコーネルの民族誌のなかには描かれることはなかった。実は，こうした特徴――コンタクト・ゾーンを推測させるような描写が一切ない――は，コーネルだけでなく他の CJS の文化人類学研究者，さらには彼が依拠し，調査研究のための教科書として頻繁に引用や参照をしたジョン・F・エンブリー（John F. Embree）の『日本の村須恵村』（*Suye-Mura*）［1939=1978］にも当てはまるものである。なお，エンブリーは日本ではじめてフィールドワークを実施して民族誌を著した米国人人類学者である。

コーネルの『馬繋』が依拠したエンブリーの『日本の村須恵村』は，構造機能主義的手法に基づいて作成された民族誌である。構造機能主義的手法は，A. R. ラドクリフ＝ブラウン（Alfred R. Radcliffe-Brown）が提唱した研究手法の呼称であり，1950年代から1960年代にかけて隆盛を極めた。彼は，1906年から1908年にかけてベンガル湾のアンダマン諸島において調査に従事し，現時点における社会を綿密な現地調査に基づいて理解するための手法として，「社会構造」（social structure）に着目した研究の重要性を示した。それは，具体的には「機能」を社会の統合の維持に対する寄与として捉え，「社会構造」を，慣習とは別の体系として捉えて綿密な「構造分析」を行う手法である［吉田 1969：165-166］。以上の理論は，1940年代以来，英国の社会人類学によって修正されつつ継承され，1960年代の米国や仏国の人類学においても重要な位置をしめることとなった［吉田 1969］。しかし，1960年代になると，ラドクリフ＝ブラウンの社会構造論は，あまりに静態的であるとして，その弱点が指摘されるようになった。社会を成り立たせる構造を描き出すことを優先させる分析方法であるがゆえに，そこには調査対象地域の人々の心理や彼らと分析者との交流についての記述が挾み込まれる余地はほとんどないのである。そのため，この手法は，後に「社会を客観化するために，なるべく人間から遠ざかり，遠心的立場にたって観察し，明確かつ科学的な概念をもった分析」［泉 1971：138］とも称され，批判の対象とされるようになったのである。つまり，本論に即していえば，そこにはコンタクト・ゾーンが描かれていないということになる。

そのことを具体的に見るために，エンブリーの『日本の村須恵村』とコーネルの『馬繋』の目次構成を比較する。

以上からは，社会組織の構造と機能に関する記述が大部分を占める一方，そのなかに生きる個人の感情や葛藤などの心理面には注意が払われていないことがわかる。『日本の村須恵村』には「個人の生活史」や「宗教」という項目があるが，人生儀礼と人々が持っている多様な信仰の内容が記述されている一方，個々の人間の感情や葛藤には焦点が当てられていない。『馬繋』にはその傾向がより強く見受けられる。なお，『馬繋』の原本である

表1　目次の比較

エンブリー著『日本の村須恵村』の目次構成	コーネル著『馬繋』の目次構成
Ⅰ　歴史的背景	Ⅰ　序論
Ⅱ　村落の構造	Ⅱ　天然資源と物質文化
Ⅲ　家族と世帯	Ⅲ　世帯の組織
Ⅳ　協同の諸形態	Ⅳ　buraku の社会組織と生活
Ⅴ　社会階級と団体	Ⅴ　文化的側面における外部との関係
Ⅵ　個人の生活史	Ⅵ　親族や buraku や個人の間の関係における世帯の優位性
Ⅶ　宗教	Ⅶ　要約と結論
Ⅷ　須恵村の社会組織における外観上の変化	

彼の博士論文には Appendix として次の項目が含まれる。(1)世帯における個人の生活史，(2)宗教，(3)経済や技術に関する基本的データ，(4)社会組織に関する補足的データ，(5)日本語の注釈と用語集。しかし，筆者が馬繋において確認した，コーネルと住民たちとのコンタクト・ゾーンは織り込まれることがなかった。

これに対し，1980年代に入ると，構造機能主義的手法に基づく民族誌の弱点を補うものとして，文化人類学では「人物中心的民族誌」（person centered ethnography）と呼ばれる手法[6]が登場する。この手法は，従来の構造機能主義の手法が記述の対象から外していた「描写される側の論理を優先し，彼らの生きた心理や感情を描写すること」［箕浦 1999 : 79］を目的としていた。また，そこでは個人すなわち個人の心理と主体的な経験の双方がいかに社会文化的過程を形成し，また形成されるかという点に主眼が置かれた［Hollan 2001 : 48］。実は，調査地における個々の住民の心理や感情を描写する手法は，書き手である調査者が彼らとどのように関わったのかということも不可避に含み込むことになる。すなわち，そのような手法による民族誌はコンタクト・ゾーンを内包することになる。

コンタクト・ゾーンが描かれない民族誌と描かれた民族誌の対照的なあり様を示す具体例として挙げることができるのが，エンブリーの『日本の村須恵村』と，彼の妻であったエラ・ウィスウェルと文化人類学者のロバート・J・スミスとの共著『須恵村の女たち』である。

3　コンタクト・ゾーンが描かれない民族誌と描かれた民族誌――『日本の村須恵村』と『須恵村の女たち』

『日本の村須恵村』［1939=1978］は，フィールドワークを基に作成された，米国人によるはじめての日本の民族誌である。著者のジョン・F・エンブリーは，1935年から1936年まで熊本県球磨郡須恵村に滞在し，フランス語とロシア語を専門とする言語学者の妻エラ（Ella Wiswell, 須恵村での調査当時の姓は Embree）と2歳の娘クレア（Clare）を伴ってフィールドワークを実施した。その当時，彼はシカゴ大学大学院博士課程の Ph. D. candidate であった。彼が日本の農村調査をすることになった経緯には，1930年代の米国の国家戦略と密接に関連した地域研究の興隆があった。

1930年代の米国では，民間助成財団のカーネギー財団（Carnegie Foundation），ロッ

クフェラー財団（Rockefeller Foundation）ならびにフォード財団（Ford Foundation）が，各研究教育機関に対して地域研究を奨励し，エンブリーの須恵村調査は，カーネギー財団の助成によってシカゴ大学とハーバード大学が実施したプロジェクト「異なる近代化の度合にある4つの現代的コミュニティの比較研究」（対象はシシリー島，メキシコ，アイルランド，ケベック）の東アジアへの拡張によって実現されたものである［Guneratne 1992］。その指揮をとったのは，当時シカゴ大学で客員教授を務めていた社会人類学者のラドクリフ＝ブラウン[7]であった［ラドクリフ＝ブラウン 1978：1-2；Embree 1939：8；スミス 1989：362］。彼は，エンブリーを日本へ派遣し，エンブリーはラドクリフ＝ブラウンが提唱する構造機能主義的手法を用いて調査研究を実施したのである。

エンブリーの『日本の村須恵村』はコンタクト・ゾーンが描き込まれていない民族誌であったが，それに対し，彼のフィールドワークに同行したエラがスミスとともに約40年後に発表した著書『須恵村の女たち』（*The Women of Suye-Mura*）［1982=1987］は，彼女と須恵村の住民との間に成立したコンタクト・ゾーンの様相がはっきりと描写された民族誌である。実は，妻エラは，日本育ちのロシア人であり，神戸の国際学校の高等部を卒業した後にアメリカの大学へ進学したバイリンガルであった［箕浦 1999：79］。彼女は言語学および文学の専攻であったが，夫のジョンと同様にノートとペンを携えて聞き取りおよび参与観察を行い，須恵村の女性たちの日常会話をノートに記録した。しかし，それらのデータはその後40年の間まったく利用されることなく保管されていたのである。それが民族誌として発表されるようになった経緯には，日本研究を専門とする文化人類学者のロバート・J・スミス（Robert J. Smith）が深く関わっている。

スミスは，前項で言及したコーネルとほぼ同時期にCJSの日本調査プロジェクトに人類学のPh. D. candidateの一人として参加した文化人類学者である。彼は，当時コロラド大学大学院に在籍する人類学のPh.D. candidateであり，CJSのメンバーとして香川県の塩江町来栖でフィールドワークを実施し，それを基に作成した博士論文によって1953年にコロラド大学からPh.D.を授与された。彼は，1965年にエラ・ウィスウェルのフィールドノートを譲り受け，それから約10余年間にわたって，ジョン・エンブリーの『日本の村須恵村』と読み比べ，それとは異なる視点に基づく民族誌の作成へと画策していった。その成果が『須恵村の女たち』である。

1982年に刊行された『須恵村の女たち』は，エンブリー夫妻であったジョンとエラが須恵村調査を行った1935年から約50年の月日を経て発表された民族誌である。実際のところジョンの『日本の村須恵村』における記述と比べると，須恵村の社会構造よりも，個々の住民，特に女性の心理や感情に重きが置かれた描写がなされていることが見て取れる。このような対照性が，同じ調査地に同時期，同期間滞在した二人の調査者の民族誌に現れていることは興味深い事実である。実は，このような民族誌のスタイルにおける対照性は，『日本の村須恵村』とエラのフィールドノートとを何度も読み比べ，『須恵村の女たち』を作成したスミスが意図して生み出したものである。

スミスは，エラのフィールドノートの分析において，どのような作業を要したかを懐古する文章 “Hearing Voices, Joining the Chorus: Appropriating Someone Else’s Field-

notes”［1990］を発表している。そこには，彼は「須恵村に一度も行ったこともなければ，その土地の人々にも会ったことがない」し，「（須恵村についての）基本となる民族誌の著者ジョン・エンブリーに一度も会ったことがない」［Smith 1990：361］といった問題を乗り越えながら，エラのフィールドノートを分析していったプロセスが記されている[8)]。

エラのフィールドノートから作成された民族誌は，ジョンのものと比べると，個人，特に女性により大きく焦点を当てた内容になっている。そのような違いが生じていることの第一の要因として挙げられるのは，ジョンとエラの関心の相違と，彼らのジェンダーの相違から生じる蒐集データの違いである。

1930年代の須恵村では，男性が村の政治を掌握する一方，女性はその場から比較的排除される傾向があった。このような状況についてスミスは，次のように表現している。「ジョン・エンブリーの著書は，大部分が男性で構成される合唱団が村の合唱コンサートで楽譜を握りしめてじっと見つめている様子を見せてくれた。それに対して，エラ・ウィスウェルは，コンサートに編入される断片の materials――つまり公的な舞台では決して歌を歌うことのない女性たちの歌，口笛，舞台の陰でのハミング――を我々に見せてくれた」［Smith 1990：365］。ジョンは，学校や村役場などのより公的な単位で行われる活動を重点的に調査したことにより，自ずと男性の話者を対象とした既成の社会組織やそこでの役割関係に集中することとなったのだが，それに対して「エラは主婦たちとの会話を通じて，大抵の生きた社会秩序を拾い上げる」［Smith 1990：365］ことに集中した調査を行ったのであった[9)]。なお，ある特定の社会において政治の場から女性が排除されている状況を，文化人類学者のシェリー・B・オートナー（Sherry B. Ortner）は論文 “Is Female to Male as Nature is to Culture”［1974］において，女性の「従属性」ないし「劣位性」という観点から指摘した。しかし，『日本の村須恵村』と『須恵村の女たち』の対照的な事例から見えてくるのは，女性たちは政治の場から排除されているがゆえに一見従属的な存在であるかのようであるが，実は村におけるジェンダーに基づく活動領域の相違がそうさせているにほかならないこと，そして，そこに調査者のジェンダーが関わることによって，蒐集データの内容の相違が生じるということである。たとえば，文化人類学者の妻とともに1952年から1953年に南東ナイジェリアでフィールドワークを実施したサイモン・オッテンバーグ（Simon Ottenberg）は，1990年の時点から当時を振り返って次のように述べている。すなわち，彼と妻とは，対象社会および文化をどのように分析するかをめぐってしばしば対立したが，それは彼が男性を中心に調査していたのに対し，妻は女性を中心に調査していたことに帰するとはっきりと述べている［Ottenberg 1990：145］。

ジョンとエラの民族誌の違いにおける第二の要因として挙げられるのは，文化人類学における民族誌の記述手法の変化である。

スミスは，エラのフィールドノートとジョンの『日本の村須恵村』を丹念に読み比べるなかで，次のことに気づいたと述べている。『日本の村須恵村』からは「農民たちの生きる息吹が感じられない」［Smith 1990：364］こと，そして「須恵村の人々はぼやけており，彼らの個々人の声は高度に平準化された土地の描写のなかに埋もれていた」［Smith 1990：364-365］こと，そして，「そのテキストにはほとんど人々が存在していない」［Smith

1990：365］ことを発見したと述べている。このことが『須恵村の女たち』において女性たちの生活誌を再構成する試みを行うきっかけとなり，生活する人々の心理や感情により焦点を当てた記述を目指したのである。それは，エンブリーの『日本の村須恵村』を補完する内容を持つとともに，「人物不在の構造分析」的手法に対する批判ともなっている。そして，さらには，スミス自身が1950年代に発表した民族誌 “Kurusu”［1956］に対する自己批判の意味合いも随伴している。『須恵村の女たち』では，エラは “I” として登場し，彼女の個人的見解に基づく叙述がなされる。そして，須恵村の個々の女性が語った内容を「“ ”」で括ることにより，一人称と三人称が混在する手法での記述がなされている。こうした記述が可能になるのは，エラと須恵村の女性たちとの間にコンタクト・ゾーンが成立していたからにほかならない。個人的な叙述を記述に内在させることの意味について，メアリー・L・プラットは次のように述べている。個人的な叙述が注目に値するのは，民族誌という客観化された科学に移し換えられる過程において取り払われてしまった，対面的なフィールドでの出会いや自らのフィールドワークへの熱中といった個人的経験の幾つかの断片を取り戻すことができるという理由からである［プラット 1996：61］。

文化人類学では，1970年代後半より，客観的に事実を記述するということは不可能であり，研究者が見ているのは，再構成された現実（reality remade）であるという考えが強くなってきたことが指摘される［箕浦 1999：80］。こうした見方に基づくと，文化人類学者の箕浦康子が述べるように，フィールドワークと解釈的アプローチは表裏一体の関係にあり，調査者の解釈は，一つの声，一つの見方でしかないということになる［箕浦 1999：80］。しかし，文化人類学の民族誌は人類学者個人の判断やそれに基づく解釈によってのみ成立しているわけではない。すなわち，各人類学者（あるいは分析者）が作成する民族誌のあり様は，各時代において主流の理論や手法からの影響を多分に受けて成立する相対的なものなのである。また，本論のテーマにひきつけて述べるならば，民族誌に記述の相違が生じるのは，調査地と人類学者が所属する社会との間の社会政治的関係の状況とその変化によっても大きく左右されるからである。本論が検討の対象とする，米国人人類学者による日本研究は，その一例である。

4　文化人類学的理論と手法の変化の影響と民族誌――戦中と戦後の米国人人類学者による日本研究から

本節では，占領期の日本でフィールドワークを行った CJS の米国人人類学者の研究を対象とし，戦中と戦後における米日関係の変化が，文化人類学的理論と手法，ひいては民族誌の記述にいかなる影響を与えたのかについて論じる。

第１節でも述べたように，彼らはエンブリーの『日本の村須恵村』に準拠しながら，各々の調査地での調査研究を実施していった。CJS の文化人類学的研究は，当時ミシガン大学の文化人類学の准教授として教鞭を取ったリチャード・K・ビアズリ（Richard K. Beardsley）によって牽引されていた。彼は，調査研究の基本的方針を示し，人類学の Ph.D. candidate たちはそれにしたがいながら各フィールドでの調査を実施していった。

ビアズリが基本的方針として示した研究方法は，文化人類学者ジョン・F・エンブリーの著書『日本の村須恵村』の方法論と分析アプローチを踏襲し，徹底したフィールドワークの実施と構造機能主義的視点の導入を重視するというものであった[10]。構造機能主義的手法が抱える弱点は，1980年代に「人物中心的民族誌」が登場したことによって決定的になり，批判の対象とされることとなったが，そうとはいえ，1950年代初頭の CJS の文化人類学者たちにとっては依然として有効な手法と考えられていた。さらにいえば，以下述べるように，この手法は，戦時中の対日戦略で実施された研究を乗り越え，その問題点を克服するという点からしても，有効な手法と彼らは考えていたのである。

戦時中の対日戦略の代表として挙げられるのは，文化人類学者のルース・ベネディクト（Ruth Benedict）による著名な『菊と刀』である。占領下の日本で実施された CJS の日本研究は，対日戦略の一環であった『菊と刀』における方法論上および理論上の問題点を見出し，それを克服することを目指したのである。そして，『菊と刀』に「自民族中心主義」的な考え方が潜在していることを見出し，それを克服するという目的を持って調査研究にのぞんでいた。

『菊と刀』の著者であるベネディクトは，太平洋戦争勃発後に米国国内では対日プロパガンダ機関として設置された戦時情報局（The Office of War Information）の諜報チームの一員として，日本研究に携わった。そして，『菊と刀』は，1944年 6 月に彼女が委託された研究を基に，1946年になってから一般読者向けに再編されて発表された著作であり，全米ベストセラーとなった。

実はベネディクトは，師フランツ・ボアズ（Franz Boas）とともに「文化相対主義理論」を提起した文化人類学者として有名である。彼女が1934年に発表した著書 *Patterns of Culture*（『文化の型』）［1973=1934］では，「文化の相対性を認めることは，そのこと自身に価値がある」［ベネディクト 1973：390］との見解が示された。しかし1941年12月 7 日午前 7 時49分（日本時間 8 日午前 3 時19分）に太平洋戦争が勃発し，その半年後の1942年 6 月13日に開設された戦時情報局に人類学の専門家として招聘されたことをきっかけに[11]，彼女は，戦略的な意図の下での研究活動に従事していくことになったのである。『菊と刀』については，発表後に様々な観点からの議論が生じたが，なかでも戦前の日本でフィールドワークを行った唯一の米国人人類学者であるエンブリーは辛辣な批判的議論を展開した。すなわち，文化相対主義の立場を標榜していたはずの彼女自身が，敵国研究への没頭によって，「戦時中の社会的需要にうまく適合した形での自民族中心主義」［Embree 1949-1950：440］の陥穽に嵌った事実を指摘し，それに対して強い憤りを表明したのである[12]。

エンブリーは，1945年から1950年にかけて 4 篇の手記および論文を発表し，ベネディクトの倫理観や研究方法に対して批判を加えていった。特にアメリカ文化人類学会誌である *American Anthropologist* No. 47に掲載された論文 “Applied Anthropology and its Relationship to Anthropology”，および同誌 No. 50に掲載された手記 “Letters to the Editor: A Note on Ethnocentrism in Anthropology” では，辛辣なコメントを寄せている。

政府と大学の仕事との間における特に最近の発展といえば，“国民性構造”――特に敵国の――への没頭である。このグループによってなされた日本に関するいくつかの陳述は，初期の頃の人種主義を彷彿とさせる。我々の敵には好ましからぬ性格構造があり，この見方には，我々はより優位にあるために，我々のものとは異なる家族生活，教育，民間信仰に対して許可なく立ち入り，必要あらば強制的に改革する道徳的権利を持っている，という強い含蓄がそこにはある。それはフランツ・ボアズの後継者たちの教義である［Embree 1945：635-637］（強調は筆者による。以下同じ）。

第二次世界大戦前，人類学者たちは現代アメリカを他の多くの社会と何ら変わらない一社会であると認識し，そのことに疑いを持たなかったが，東洋の国に攻撃されるや否や客観性を失い，彼らを「異常」な人々，あるいは「未熟」な文化を持つ人々とみなすようになり，「人種的な劣等性」を付与した［Embree 1950：430］。

なお，上記の「我々のものとは異なる家族生活，教育，民間信仰に対して許可なく立ち入り……」という引用は，『菊と刀』批判にとどまらず，エンブリーが，占領期の日本における GHQ の戦後改革のやり方に対して不満を持っていたことも暗示している。

その一方で，彼は人類学者のあるべき姿を模索しながら，彼自身の回答を次のように述べている。

人類学者のなかには，海軍の行政官の養成や現地でのアドバイスという面での技術的な支援に満足せず，さらに異なる文化と西洋のやり方の優位性に関する自民族中心主義的な考え方を職務上受け入れるものもいる。…中略…人類学者は，諸文化に対する自らの客観性に誇りを持つ存在である。…中略…人類学者の第一次的な対象は，人間とその文化，そして人間とその文化との間の関係の性質を研究することにある［Embree 1949-1950：432］。

人類学者の仕事は，人間の社会と文化を研究し，社会のなかでの人間の相互行為のやり方を学び，社会組織の性質を学び，文化が獲得され伝えられていく方法を学び，文化接触と変容の方法と効果を学ぶことにある。正当な一般化に到達するために，人類学者は比較という方法論を使わなければならない――たとえば，親族体系の性質と機能や，信仰と行為，贈与交換と取引のようなことに関する結論を導きだすために，多様な種類の社会を研究し，そこでの発見を相互に比較し，文化と社会についての多様な仮説を立てるなど。人類学者はフィールドワークを行うなかで，外国の社会について学び，彼らとうまく付き合う特別な技術を身につける。人類学者は様々な種類のエチケットや倫理の詳細を含めた人間の文化の多様な側面の相対性に関する感覚を発達させているのである［Embree 1946：493］。

つまりエンブリーは「自民族中心主義」を排し，なおかつ GHQ による日本の戦後改革

とは一線を画した研究を行うために，人類学者自らがフィールドの人々と接触し，文化の相対性についての「感覚」を精錬させなければならないと考え，それを具現化するために有効なのが「比較」の視点であると述べたのである。こうしたエンブリーの主張は，彼自身が1935年から実施した１年にわたるフィールドワークで日本の人々や文化に触れた経験に立脚したものである。以上に示したエンブリーによる一連の議論は，エンブリーは『日本の村須恵村』のなかではまったく記述してはいないが，疑いもなく須恵村の人々とコンタクト・ゾーンを構築していたことを示している。そして，彼のこの議論は，次に述べるように，1950年から始まる日本研究の再出発に指針を与えるものとなったことが，ビアズリによる次の論述に示されている。

ビアズリは，CJS の機関誌 *Occasional Paper* の創刊号［1951］に掲載された彼の論文 “The Household in the Status System of Japanese Villages” において，『菊と刀』に対する批判を行いつつ，それへの解決策を提示し，CJS の基本的方針を表明している。

ビアズリによるベネディクト批判の焦点は，次の二点に向けられている。一つは『菊と刀』に内在する自民族中心主義的な考え方に対してである。彼はベネディクトが「義理」と「義務」の観念を日本にしか存在しない「奇異」［ベネディクト 2005：142］なものとして描き出した点を問題視し，むしろこれらは日本と類似した社会構造を持つ地域や社会であればどこでも見出しうる観念だと主張した［Beardsley 1951：68］。

いま一つの批判は，『菊と刀』における研究対象へのアプローチ方法に対してである。彼はベネディクトが日本の社会構造に十分な配慮をせずに文化を論じ，日本における最も基本的な社会単位を「個人」とみなして分析したことを批判している。逆にいえば，文化はパーソナリティをひとまわり大きくしたものとの仮説[13]の下に，日本文化を一面的に描写してしまったことへの批判ともいえる。これに対してビアズリは，日本において最も重要な社会単位は「個人」ではなく「家（household）」や「血縁家族（consanguine family）」や「階級（class）」であると指摘し，「個人」とは家・家族・階級の一構成要素にすぎないと主張した［Beardsley 1951：70］。なお，このような彼の批判は次の調査データに依拠している。それは彼自身が実施したフィールドワーク（1950年の７月に長崎県下県郡豆酘村――現長崎県対馬市厳原町豆酘地区で１ヶ月間），および CJS のメンバーが実施した延べ９ヶ月間のフィールドワーク（現岡山県岡山市大字新庄下新池地区）である。

以上のように『菊と刀』を批判する一方で，ビアズリは CJS の人類学的研究が採るべき研究方法に関して次のような見解を述べている。

> 日本人に対する総体的な性格描写についての最も精緻な一般化は，日本における数多くの土地，そして広範にわたる多様な社会的 classes を含めた集団から情報を得ることによって可能になる［Beardsley 1951：70］。

つまりビアズリは日本社会の「構造」を抽出することに重点を置きながら，それを具現化する方法として，メンバーによる詳細なフィールドワークに基づく実証研究と，それらの成果の総合を重視し，それによってはじめて日本に関する「最大限に精緻な一般化」

［Beardsley 1951 : 70］が実現されると考えたのである。

以上の方法の実現に際して彼らが採用したのが「縮図（microcosm）」概念であった。これは調査対象とする集落を日本社会の「縮図」と捉え，それを徹底的に研究することによって日本が解明できるとする考え方に立脚したものである［石田 1985 : 49, 214］。人類学のみならず地理学や歴史学などの多分野にわたるCJSのプロジェクトでは，この「縮図」が全領域に通底する共有概念として導入されている［石田 1985 : 49, 214］。ちなみに図1は，「縮図」概念を具体的に示すために筆者が作成したものである。

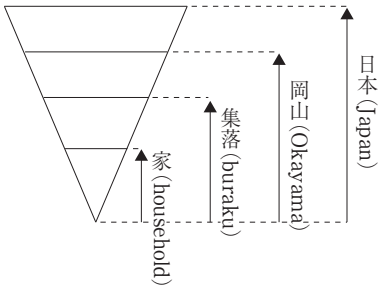

図1　日本社会の「縮図」

CJSのメンバーは各々がフィールドとして選んだ集落（彼らの用語ではburaku）を，岡山の，あるいは日本の「縮図」とみなし，さらに集落については「家（household）」の集合体として把握したのである。

このような彼らの基本的立場は，彼らが自身の調査地に対する次のような表現に表れている。たとえば，彼らは，各調査地を他と比べて著しい特徴のない極めて平均的な日本の村落である[14]［Beardsley *et al.* 1959 xiv ; Smith 1956 : 1］と述べ，徹底的に調査研究することによって日本社会の実態を解明することができると考えたのである。

なお，CJSメンバーの人類学者が選定した調査地は，岡山県の漁村と山村，および香川県の農村から各々選ばれた――具体的にいえば，それは岡山県倉敷市児島塩生（しおなす）高島，岡山県新見市草間馬繋，香川県高松市塩江町安原下来栖，岡山市大字新庄下新池の4地域である。

一方，人類学に限らず様々な分野をそれぞれの専門とするCJSのメンバーには共通した研究課題があった。それは日本の戦後改革後の「近代化」や「民主化」の実態を観察し，その後の変化を予見するというものであった。彼らは民法改正に伴う「家」の実態の変化に特に注目していた。なぜならば彼らは「家」こそが日本の封建的性格の温床であると捉え，日本の「近代化」や「民主化」はそれが解体されることによってはじめて可能になると認識していたからである。

馬繋でフィールドワークを実施したコーネルは，当集落の農業が「機械化」されていく様相を目の当たりにして次のように述べている。機械化は，共同作業の機会の減少をもたらし，その結果「村落社会の統合性は弱まる」が，その一方で，個々の「家」における統合性やその重要性は維持され続け，「西欧化とそれに伴う経済的変化」によっても当分変化しない［Cornell 1956 : 193］。これに対して政治学者のウォード（Robert E. Ward）は，民主化の帰結に対して別の見解を持っている。彼はビアズリとともに新池を研究した人物であったが，コーネルの調査データを参照しながら次のように述べている。占領軍が行った「民主化」政策は，「接ぎ木（graft）」のようなものであるゆえに「奇妙な実を結ぶ可能性」がある［Ward 1951 : 4］。というのも民主主義の制度と慣習は「経済と政治がある発達段階に到達した，個人主義（individualism）が優勢なキリスト教社会の需要にそって

育まれてきた」[Ward 1951 : 4] ものであるがゆえに，家・家族・村落社会を重要な社会単位とする日本には容易に根付くことができない。しかし，いったん民主主義が村落社会に浸透するならば，その没個性的であった地域に大きな変化がもたらされる，と考えたのである。ともかくコーネルやウォードらが観察や描写を試みようとしたのは，戦後改革後に想定される「近代化」や「民主化」によって，「特徴がない」「典型的」な集落が特徴ある集落となっていく様相であったともいえる。

以上のようにコーネルやウォードらは，戦前／戦後になされたエンブリーの研究と対話しながら，その影響下で集中的なフィールドワークを方法論として選びとり，日本の村落社会に関する詳細な事例を収集しようと努めていったのである。そして，それによって戦中におけるベネディクトの立場を批判的に乗り越え，戦後の日本研究における自らの方向性を画定させようと試みたのである。ところが，彼らはどのような基準をもって各調査地を，「典型的」「代表的」や「著しい特徴がない」と形容することができるのかについての明確な論拠を示さなかった[15]。また研究対象を岡山とその周辺に限定したうえで，その地域を日本における地域的差異，あるいは民俗の多様性のなかに再定位するための発展的な議論を行うこともなかった。そのために彼らがモノグラフで提示した「縮図」概念は恣意的な想定に基づくものであり，その延長線上で提示された日本像が『菊と刀』の問題点を乗り越える斬新なものには必ずしもなりえなかった。

しかし，こうした弱点の一方で，彼らが重視したフィールドワークと彼らが採用した構造機能主義的手法は，次のようにある一定の効果をもたらすものでもあった。

彼らが占領下の日本で調査研究を行う際に，最も陥ってはならないと自覚し拒否していた態度とは，すなわち「我々はより優位にあるために，我々のものとは異なる家族生活，教育，民間信仰に対して許可なく立ち入り，必要あらば強制的に改革する道徳的権利を持っている（と考える）」[Embree 1945 : 635-637] 態度であった。彼らは，１年間を通じたフィールドワークによって，占領期の日本における特有の植民地的状況のなかで，調査地の人々との間にコンタクト・ゾーンをたしかに成立させていた。このことは，「自民族中心主義的」態度を排し，文化相対主義的な立場から研究を行おうとする彼らにとって，単なる人類学者としての訓練を超えた体験をもたらしたのではないかと考えられる。また，以上のような問題意識を持っていた彼らにとって，結果的に文化相対主義的な立場をよりよく反映させるために有効であったのが，矛盾するようではあるが，「人間不在の構造分析」ともいわれる構造機能主義的手法であったといえる。

5　結語

本論の第２節では，第一に，1950年代初頭の日本で実施された米国人文化人類学者ジョン・B・コーネルのフィールドワークを対象として，彼が調査地馬繋の人々との間にコンタクト・ゾーンを成立させていたことについて論じた。具体的には，コーネルが，占領期における米日間の戦勝者／敗戦者や統治者／被統治者という非対称的関係が存在するなかで，住民との間の相互作用や相互理解を成立させていたことについて論じた。しかし，馬

繋での調査データを基に彼が作成した民族誌を検討すると，フィールドでのコンタクト・ゾーンは描かれていない。第二に，それが何によるのかを検討した。その結果，彼が民族誌の作成に際して採用した構造機能主義的手法が深く関わっているのではないかとの仮説を得た。こうした観点から，第3節では，フィールドにおけるコンタクト・ゾーンが描かれた民族誌と描かれない民族誌，具体的には『日本の村須恵村』と『須恵村の女たち』の比較検討を行い，どのような手法でどのような民族誌を書くかは，書き手である人類学者個人の判断よりもむしろ，人類学者が拠って立つ各時代の主流理論の影響を受けていることの具体的様相について検討した。そして第4節では，民族誌のあり様に影響するいま一つの要素について，占領期の日本を対象としたCJSの文化人類学者たちによる学問的挑戦を具体事例として論じた。すなわち，民族誌の記述手法が，調査地と人類学者が所属する社会との間の社会政治的関係の状況によっても影響を受けることについて論じた。

文化人類学は，フィールドワークを重要な方法とし，それこそを他の学問分野とを隔てる特徴とすることで存立してきた分野である。このことについて，1920年代から1970年代を通じて活躍した文化人類学者のマーガレット・ミード（Margaret Mead）は次のように述べている。

> 人類学が他とはちがう独自の科学として発展してゆくさいにその素材を提供してきたのは，フィールドワークである［ミード 1984：1］。

文化人類学者のレーナ・レダーマン（Rena Lederman）は，以上のミードとは別の角度から，同様の主張をしている。すなわち，フィールドにおいて人類学者が調査地の人々や文化と接触したことの記録としてのフィールドノートを基に，民族誌を作成していく抽象化や理論化のプロセスにこそ，文化人類学の学問的な特質があると述べる［Lederman 1990：71］。

以上のことを，より本論にひきつけて述べるならば，文化人類学におけるフィールドワークとは，すなわち自己とは異なる生活様式や考え方を発達させ，そこに生きる人々とのコンタクトを通じて，しばしば手に負えない葛藤を巻き込みながら，継続的な関係性を作り出す学問的営為であるといえる。フィールドノートとは，そのことの文字化された記録にほかならない。何をフィールドノートと呼ぶのかについては統一された見解はないものの，人によっては調査データの記録のほかに，データの解釈や個人的見解を盛り込んだ日誌，あるいは日記のようなものもフィールドノートに含めうると考える人もいる［Lederman 1990：74］。

著名な社会人類学者ブラニスラウ・K・マリノフスキー（Bronisław K. Malinowski）は，参与観察という手法を導入したはじめての人類学者である。彼は，1914年から1918年にかけてフィールドワークを行うなかで，「現地語を達者に話し，彼の描写したトロブリアンド島民の諸活動のほとんどに自ら参加し観察し」［リーチ 1985：26］，民族誌『西太平洋の遠洋航海者』（*Argonauts of the Western Pacific*）［1922=1967］を著した。しかし，その死後に出版された『マリノフスキー日記』（*A Diary in the Strict Sense of the*

Term）［1967=1987］は，彼の民族誌には決して記されなかった現地の人々に対する彼の敵対心が顕わにされていた。このことは，当時の人類学界に大きな波紋を投げかけた。同書の訳者である谷口佳子は，当時の衝撃の意味を次のように位置づけ，解説している。すなわち，同書は，植民地支配下のように，調査者と被調査者との間に越え難い社会的地位や力の差が存在する場合に，「他者理解を通しての自己認識」が果たして可能であるのかという問題を生じさせるきっかけとなったと述べている［谷口 1987：437-38］。これは，まさに本論が対象とするコンタクト・ゾーンに関わる問題である。

マリノフスキーの日記もまたフィールドノートの一つに数えうるとすると，フィールドノートにこそ，人類学者のコンタクト・ゾーンが描き込まれている可能性がある。

人類学者がどのようなフィールドノートを作成し，データを記録・管理しているのかについては，公の場でなされた議論はあまりない。そのなかで，1985年開催の「フィールドノートに関するパネル・セッション」や1990年に文化人類学者のロジャー・サンジェク（Roger Sanjek）の編集によって刊行された論文集 *Fieldnotes : Making of Anthropology*［Sanjek 1990］における議論は注目に値する。そのなかで議論されたのは，人類学者のフィールドワークやフィールドノートに関する個人的な経験や，民族誌を書くに至るまでの具体的な作業プロセスであった[16]。そして，そこでは過去の民族誌論が抱えた問題点が指摘されたうえで，フィールドノートを人類学者としてのアイデンティティを象徴するものとして位置づけ［Jackson 1990：3-35］，文化人類学が取り扱うべき主題，さらには学問的な独自性の再確認するための議論がなされた点で興味深い。たとえば，『須恵村の女たち』は，エラ・ウィスウェルのフィールドノートを基に，ロバート・J・スミスが彼女とともに著した民族誌であり，そこにはフィールドでのコンタクト・ゾーンが描き込まれていた。彼らの研究は，民族誌の記述には反映されなかったフィールドノートの記録を再利用し，生かすような研究の存在意義を示していると考えられる。

文化人類学は，コンタクト・ゾーンを必然的に伴うことになるフィールドワークを重視する学問である。それならば，それが反映された記録としてのフィールドノートの分析プロセスに焦点を当て，そこから新たな手法やアイディアを生み出すような研究がもっとあっても良いのではないかと考える。

注

1） 文化人類学者の田中雅一は，文化人類学的フィールドをコンタクト・ゾーンとして把握する視座を，論文「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ――『帝国のまなざし』を読む」［田中 2007］において提示した。

2） 日本は，第二次世界大戦後のポツダム宣言の受諾（1945年 8 月）からサンフランシスコ講和条約の発効（1952年 4 月28日）まで，6 年半にわたる GHQ の占領下にあった。

3） 米国は，日本の占領における最重要課題として「民主化」を掲げ，そのために法律や制度の改革に乗り出していった。しかし，米国の「民主化」の対象は法や制度面での改革にとどまらなかった。「民主主義」の考え方を津々浦々の老若男女にまで行き届かせるという意図の下，日本各地の村や町単位での米国人チームの派遣，学校教科書の検閲，さらにはマス・メディアに対する影響力の行使などを同時に行っていったのである［ダワー 2001：274-265］。日本統治の実態は，米国が「非民主主義的」制度とみなしていた官僚制と天皇制を温存し，それを利用して進められたともい

えるのだが，その他方で，「民主主義」を草の根レベルで浸透させるための方法が画策されてもいたのである。

4） コーネルは，以上のようにして収集した調査データを，宿に戻った後にキーワードと日付をふって整理し，文章化した。それに役立ったのが，彼が米国から持参したタイプライターとインデックス・カードであった。

5） むろん，コーネルが滞在した1年間は，馬繋の人々にとってはじめての異文化接触の機会であり，彼ははじめて対面的に交流した外国人であった。しかし，米国人のコーネルは，彼らにとって単なる異郷人や，かつての「敵国」からの来訪者ではなかった。米国のポップ・カルチャーは，日本において1920年代頃から始まる大正デモクラシーの機運のなか，大都市でのジャズやハリウッド映画の流行を中心に，徐々に浸透していたのであり，米国は，潜在的に「自由」や「恋愛」，「豊かさ」といったイメージで捉えられる，人々の羨望や欲望の対象であったとも考えられるのである［吉見 2002：3-62］。

6） 構造機能主義的民族誌に対する批判としての人物中心的民族誌は，エドワード・サイードの「オリエンタリズム」批判以降，文化人類学内で盛んに問われるようになった次のことを無化するための有効な手法の一つと考えられた。それとは，他者表象における人類学者の優位性である。

7） 1935年まで客員教授としてシカゴ大学社会科学科で教鞭を取っていたラドクリフ＝ブラウンは，エンブリー著『日本の村須恵村』の紹介文に寄せて次のように述べた。「（社会人類学の）目的を達成させるための唯一の方法は，かなり異なる社会類型を相当数比較すること」である［Radcliffe-Brown 1978：1］。彼によると，エンブリーの須恵村研究は「人間社会の比較研究」に資料を提供するものであったと解説している［Radcliffe-Brown 1978：1］。

8） スミスは次のように述べることによって，エラのフィールドノートに高い学問的価値を見出している――神戸で幼少期を過ごしたエラは，流暢な日本語を用いて村の女性たちと密接に交流したことで，その日誌には村の女性および子供たちの生活に関する詳細な情報が書き込まれることになった［Smith 1990: 359-60］。1930年代後半において，日本の社会科学者の誰もがこのような性質の素材を集めていなかったし，また，エラの日誌の内容にあるような情報はいかなる言語のものも存在していなかったという［Smith 1990: 360］。

9） 1936年2月15日付のエンブリー夫妻による『フィールドワークの第一報告書――日本の熊本県須恵村』［Embree & Embree 1936］。

10） 大学院生として参加したジョン・B・コーネルとロバート・J・スミスが作成したモノグラフ（彼らの博士論文を，目次構成をそのままに縮小して作成したモノグラフ。CJS の第5号に Two Japanese Villages として特集された）の目次構成に注目すると，『日本の村須恵村』を参考にしたことが一目瞭然である。そのスタイルはラドクリフ＝ブラウン流の構造機能主義的アプローチに依拠したものである。このことは，『日本の村須恵村』が，1930年代にシカゴ大学のロバート・レッドフィールドが中心になって実施した地域研究プロジェクトの一部であったことや，エンブリーの指導教官がラドクリフ＝ブラウンであったことを考えると，必然であるといえる。

11） 人類学のほか，心理学・社会学・精神医学の専門家も招聘された。

12） エンブリーは1945年から1950年にかけてベネディクト批判を展開しているが，その初期の議論が含まれている著作として *The Japanese Nation : A Social Survey*［1945］を挙げることができる。これは日本が降伏する数週間前の1945年7月に発表されたものであり，そこでは日本が戦争へと向かった要因が，国民性研究とは異なる視角から論じられている。つまりエンブリーは「国民性」や「文化の型」ではなく，日本の社会組織の歴史的，経済的な成り立ちに注目することによって，その要因に迫ろうとしたのである。ビアズリの指導の下，ミシガン大学大学院で Ph.D. を取得した地理学者のベッドフォード・雪子は，論文「アメリカのエアリア・スタディにおける日本近代化研究の軌跡」［1985］のなかで次のように述べている。「日本社会に自律の精神や非常な困難さを克服して成功を収めることに対する高い社会的価値があることを認め，そのような価値観はアメリカの伝統と類似しているとも論じ，対戦国である日本をも社会学者として客観性を失わず，かつ温かい筆致で述べている」［ベッドフォード 1985：281］。

13）『菊と刀』において描写される日本像は，この「文化の型」概念に基づいている。文化人類学者の綾部恒雄と田中真砂子の解説によると，「文化の型」の概念は，「機能主義」が持つ弱点を補う理論として提示されたものである。たとえば，ブラニスラウ・マリノフスキー（1884-1942）は，「客観的事実としての統合的全体を静態的に捉えた」が，その一方では，「個々の文化の持つ主観的側面をほとんど無視していた」点に弱点があった［綾部・田中 1995：88］。それに対して「文化の型」の概念は，それぞれの文化にはその文化全体を内面から性格づける，独自な「主観的な欲求（dominant drive）」または「ライトモチーフ（主旋律）」があるとの考えを基に，文化はパーソナリティをひとまわり大きくしたものとの仮説によりこの概念は成立する［綾部・田中 1995：89］。

14） 以下は引用である。「瀬戸内海地域を選んだ理由は，そこが日本の歴史と文化の発達と関連した，古く，連続性のある安定した地域であるということにある。岡山は，瀬戸内海地域に面する11の県のなかから，その他様々な要因によって選ばれた。その要因とは，農業，特に稲作を主体とする県であり，経済という面において，産業部門でも商業部門でも適当な規模であること，そして岡山は，極端な対照をなしている都市の大阪，または地方の愛媛よりも，全体的な環境という意味で，現代日本の代表とみなしうるというものである」［Beardsley *et al.* 1959: xiv］。

「研究されることに抗しない程度の都合の良い人口を擁する，稲作を主体とするコミュニティであったため，新池を選んだ。また，潜在的に同様の成果が期待できる他のコミュニティよりも便利な位置にあったということも理由の一つである。そして何よりもの理由は，我々にとって，新池が珍しさや独自の特徴を欠いていたということであった」［Beardsley *et al.* 1959］。

「（自らの調査地である）来栖という村落（hamlet），あるいは集落（buraku）は，一見，注意を引くような特徴を持っていない。つまり，来栖は低い丘に向かって後退し，川とコミュニティとの間に広がる畑を擁する100以上もの小さなコミュニティと大変類似している」［Smith 1956：1］。

15） 彼らが調査地の選定理由として述べる内容は，エンブリーによる須恵村の描写と高い類似性がある。エンブリーは特に「縮図」概念に依拠していたわけではないが，須恵村について，「日本の村落社会の一般的傾向から特に区別されるような著しい特徴がない（ムラである）」［Embree 1939: xxi-xxii］と述べている。ただし，彼らは地域的差異に必ずしも無関心であったわけではない。彼らは既刊の調査報告書を積極的に活用し，自らのモノグラフに参照や引用さえしている。たとえば，先述のコーネルは，自らがフィールドで観察した事例の事実確認や相対化を行うために，レイパー（A. S. Raper）らの *The Japanese Village in Transition*［Raper & others 1950］（GHQ が須恵村を1947年から 1 年間に延べ 4 回実施した調査報告書）や柳田國男の『山村生活の研究』［柳田 1937］（柳田國男を中心とする民俗学者が日本の500ヶ所の山村で実施した調査報告書）を幾度も引用している。しかしながら，それを引用している個所は，本文中ではなく脚注内であるにすぎなかった。つまり，地域的差異について意識的でありながらも，議論の核心からはある程度意図的に外していたのだとも考えられる。

16） 従来では，人類学者が自らのフィールドワーク体験やフィールドノートについて言及するのは，出版物の序論中であることが多く，そのほかでは，ブラニスラウ・マリノフスキーやフランツ・ボアズ，マーガレット・ミード等の著名な人類学者の出版された日記中，あるいはフィールドワークの方法論に関する教科書で主に取り扱われる傾向があった。しかし，1985年にワシントンにおいて開催された，アメリカ人類学会（American Anthropological Association）の “a panel on field-notes”（フィールドノートに関するパネル・セッション）では，当時ニューヨーク市立大学（The City University of New York）のクイーンズカレッジ（Queens College）における文化人類学の教授であったロジャー・サンジェクを中心として，民族誌論の中でほとんど注意が払われてこなかった問題，すなわちフィールドノートの位置づけや利用法などに関する考察や批評が行われた［Sanjek 1990: xii］。その成果は 5 年後に，論文集 *Fieldnotes : Makings of Anthropology*（1990）として出版された。

参考文献

綾部恒雄・田中真砂子　1995 『文化人類学と人間』三五館。

石田寛　1982 「序論的記述――ミシガン大学岡山分室の刺激」『地域研究のすすめ　続・牛歩遅遅』古今書院，pp. 3-28。
――― 1985 「１ミシガン学派による草創期の日本地理研究」『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院，pp. 39-54。
――― 1985 「補論――peasant / folk society / agriculture の適用について」『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院，pp. 234-237。
泉靖一　1971 『泉靖一著作集６　文化人類学に何を求めるか』読売新聞社。
ウィスウェル，E. & ロバート・J・スミス　1987 『須恵村の女たち』（河村望・斎藤尚文訳）御茶ノ水書房。
エンブリー，J. F.　1987 『日本の村須恵村』（植村元覚訳）日本経済新聞社。
大谷勲　1983 『ジャパン・ボーイ――日系アメリカ人たちの太平洋戦争』角川書店。
コーネル，J. B. 1977 「馬繋――山村の生活と社会」（篠原徹・川中健二訳）『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』3：81-207。
コーネル，J. B. 1985 「馬繋の30年――岡山の一山村における土地利用の変化と型」石田寛編『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院，pp. 222-233。
サイード，E. 1993 『オリエンタリズム 上』（今沢紀子訳）平凡社。
スミス，R. J. 1989「米国における日本研究―民族学」『民族学研究』54(3)：360-374。
田中雅一　2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ――『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』１：31-43。
ダワー，J. W. 2001 『敗北を抱きしめて 上』（三浦陽一・高杉忠明訳）岩波書店。
中生勝美　2006 「第四章　日本占領期の社会調査と人類学の再編――民族学から文化人類学へ」『「帝国」日本の学知　第６巻　地域研究としてのアジア』岩波書店，pp. 143-177。
プラット，M. L. 1996 「共有された場をめぐるフィールドワーク」（多和田祐司訳）ジェイムズ・クリフォード＆ジョージ・マーカス編『文化を書く』紀伊國屋書店，pp. 51-92。
ベッドフォード，雪子　1985「アメリカのエアリア・スタディにおける日本近代化研究の軌跡」石田寛編『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院，pp. 277-302。
ベネディクト，R. 1973『文化の型』（米山俊直訳）社会思想社。
――― 1949 『菊と刀』（長谷川松治訳）社会思想社研究会出版部。
――― 2005 『菊と刀』（長谷川松治訳）講談社。
マリノフスキー，B. K. 1967 「西太平洋の遠洋航海者」（泉靖一訳）『マリノフスキー／レヴィ＝ストロース』中央公論社。
――― 1987 『マリノフスキー日記』（谷口佳子訳）平凡社。
ミード，M. 1984 『フィールドからの手紙』（畑中幸子訳）岩波書店。
箕浦康子　1999 『フィールドワークの技法と実際――マイクロエスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房。
ラドクリフ＝ブラウン，A. R. 1978「紹介」（植村元覚訳）『日本の村須恵村』日本経済評論社。
リーチ，E. 1985 『社会人類学案内』（長島信弘訳）岩波書店。
ロサルド，R. 1998 『文化と真実――社会分析の再構築』（椎名美智訳）日本エディタースクール出版部。
柳田國男　1937 『山村生活の研究』民間伝承の会。
吉田禎吾　1969 「第９章　文化人類学の理論と方法」『文化人類学』有斐閣双書，pp. 161-188。
吉見俊哉　2002 「〔総説〕冷戦体制と『アメリカ』の消費」『冷戦体制と資本の文化』岩波書店，pp. 3-62。

Beardsley, R. K. 1951 The Household in the Status System of Japanese Villages. *Occasional Paper* 1, Center for Japanese Studies, Ann Arbor: The University of Michigan Press, pp. 64-72.
Beardsley R. K. *et al.* 1959 *Village Japan*. University of Chicago Press.

Cornell, J. B. 1953 *Matsunagi : The Life and Social Organization of a Japanese Mountain Community*. Ph. D. Dissertation. University of Michigan.

—— 1956 Matsunagi: The Life and Social Organization of a Japanese Mountain Community. *Two Japanese Village, Occasional Paper* 5, Center for Japanese Studies, Ann Arbor: The University of Michigan Press, pp. 113-230.

Dower, John 1986 *War without Mercy : Race and Power in the Pacific War*. Pantheon Books.

Embree, J. F. 1939 *Suye-Mura : A Japanese Village*. Chicago: The University of Chicago Press.

—— 1945 *The Japanese Nation : A Social Survey*. New York: Farrar & Rinehart.

—— 1945 Applied Anthropology and Its Relationship to Anthropology. *American Anthropologist* 47: 635-637.

—— 1946 Anthropology and the War. *The Bulletin of the American Association of University Professors* 32(3): 485-495.

—— 1949-1950 Standardized Error and Japanese Character: A Note on Political Interpretation. *World Politics* 2(3): 439-443.

—— 1950 Letters to the Editor: A Notes on Ethnocentrism in Anthropology. *American Anthropologist* 50: 430-432.

Embree, J. F. & Ella Embree 1936 The First Report on Field Work: Suye Mura, Kumamoto, Japan.

Hall, J. W. 1951 Editors Preface. *Occasional Paper* 1. Center for Japanese Studies, Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Hollan, Douglas 2001 Development in Person-centered Ethnography. In Carmella C. Moore & Holly F. Mathews eds., *The Psychology of Cultural Experience*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 48-67.

Jackson, J. E. 1990 I Am a Fieldnote: Fieldnotes as a Symbol of Professional Identity. In R. Sanjek ed., *Fieldnotes : Making of Anthropology*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, pp. 3-33.

Lederman, R. 1990 Pretexts for Ethnography: on Reading Fieldnotes. In R. Sanjek ed., *Fieldnotes : Making of Anthropology*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, pp. 71-91.

Norbeck, E. 1954 *Takashima*. Utah: University of Utah Press.

Ortner, S. B. 1974 Is Female to Male as Nature is to Culture. In M. Z. Rosaldo & L. Lamphere eds., *Woman, Culture, and Society*. Stanford, CA: Stanford University Press, pp. 68-87.

Ottenberg, S. 1990 Thirty Years of Fieldnotes: Changing Relationships to the Text. In R. Sanjek ed., *Fieldnotes : Making of Anthropology*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, pp. 139-160.

Pratt, M. L. 1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. London, New York: Routledge.

Raper, A. S. & others 1950 The Japanese Village in Transition. *Tokyo : General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers, Natural Sources Section Report* 136.

Sanjek, R. 1990 Preface. *Fieldnotes : Making of Anthropology*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, pp. xi-xvii.

Smith, R. J. 1956 Kurusu: a Japanese Agricultural Community. *Two Japanese Village, Occasional Paper* 5, Center for Japanese Studies. Ann Arbor: The University of Michigan Press, pp. 1-112.

—— 1990 Hearing Voices, Joining the Chorus: Appropriating Someone Else's Fieldnotes. In R. Sanjek ed., *Fieldnotes : Making of Anthropology*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press, pp. 356-370.

Ward, R. E. 1951 Pattern of Stability and Change in Rural Japanese Politics. *Occasional Paper* 1, Center for Japanese Studies. Ann Arbor: The University of Michigan Press, pp. 1-6.

インターネット資料

Guneratne, A. 1992 A Dialogue of Civilizations. *Robert Redfield and the Development of Language and Area Studies at the University of Chicago.* An Exhibition Based on the Papers of Robert Redfield and Milton Singer at the Regenstein Library University of Chicago, September 11-October 31, 1992 http://www.lib.uchicago.edu/e/su/southasia/singer-red.html 2009年 2 月10日閲覧。

University of Michigan Regents 2006 History http://www.ii.umich.edu/umich/v/index.jsp?vgnextoid=3dd06cf05ca82110VgnVCM1000005b01010aRCRD&linkTypeBegin=channellinkTypeEnd&assetNameBegin=HistoryassetNameEnd 2009年 2 月10日閲覧。

Stocking, Jr. G. W. 1979 Case 10: The Folk Culture of Yucatan. *Anthropology at Chicago* http://anthropology.uchicago.edu/about/cases/yucatan.shtml 2009年 2 月10日閲覧。

Brow, J. & R. Moore 2001 In Memoriam John B. Cornell http://www.utexus.edu/faculty/council/2000-2001/memorials/Cornell/cornell.html 2009年 2 月10日閲覧。